令和２年度第２回京都府総合教育会議概要

１　日　時　　令和２年 11 月５日（木）午後１時 00 分から２時 00 分まで
２　場　所　　京都産業大学むすびわざ館３階　３－Ａ教室
３　出席者　　西脇知事、橋本教育長、小畑教育委員（教育長職務代理者）、
　　千教育委員、安岡教育委員、藤本教育委員、鈴鹿教育委員
４　次　第
（１）　開会
（２）　府教育委員会における取組状況報告
（３）　意見交換
（４）　その他
（５）　閉会

---------- 会議概要 ----------

１．開会

○出席者紹介

○知事あいさつ

皆様、お忙しい中、総合教育会議にご参加いただきありがとうございます。この会議は、現在の京都がおかれている教育行政の現状や課題、問題意識を共有し、今後連携していくべき教育の条件整備や重要な施策について、ご議論いただく場のため、活発な意見交換をよろしくお願いいたします。新たに加わっていただいた鈴鹿委員にも忌憚のないご意見をお願いしたいと思います。

前回、ＷＩＴＨコロナ・ＰＯＳＴコロナ社会において、例えば地域の企業、団体、大学との教育活動におけるツールとしてＩＣＴを活用する、ＩＣＴを活用した学習方策として、海外との関係でＩＣＴ環境を活用して語学の授業や文化交流をオンラインで行ってはどうか、オンラインと対面とのハイブリッド教育の可能性について、それぞれどういう教育内容が向いているのかなど、議論いただきました。これらについては、コロナが収束する中で色々な反省点や課題が出てくるので、改めてご議論いただきたいと思います。

本日は、「京都の文化力を生かした教育力について」をテーマにしております。文化力を生かした教育というと教育に文化力を生かすだけのイメージですが、文化財もそうですがもう少し広く、文化の担い手としての若者を育てていくという意味もあり、かなりつながりが大きいと思います。私がこのテーマを選んだ理由は、2022 年度にいよいよ京都に文化庁が移転します。これを一つの契機として、教育の面で文化との関わりを幅広く議論していただきたい思いです。まだ考えがまとまっていないところもありますので、本日は幅広く意見を頂戴して、今回で終わるわけではなく、文化庁の京都移転を目指して再度ご議論賜り、幅広くヒントになるようなことをお聞かせいただければと思っております。よろしくお願いいたします。

○橋本教育長あいさつ

コロナ禍で幕を開けた令和２年度も折り返しを過ぎました。府内の学校においては年度当初から約２カ月の臨時休業を行うこととなりました。授業の遅れについては概ね取り戻すことができたと聞いています。この間、運動会、文化祭、修学旅行等の学校行事もさまざまな制約や代替行事への変更はありましたが、学校生活の大切な思い出として実施できるよう、大変たくさんの工夫が行われているところです。その一方で、グループ学習や、これまで充実させてきた他校との交流、地域や大学、企業と連携して行う学びなどは難しい状況がみられます。

しかし、この後紹介するように、各学校においては地域の伝統や文化を学び、それを発信する取組の中でもＩＣＴを活用して地域、国内、国外とつながろうと模索されています。これは前回の総合教育会議で議論された「ＩＣＴを効果的に活用した新しい学びのスタイル」だと言えると思いますが、府教育委員会としては今後ともハードとソフトの両面で子どもたちの学びの環境を整えてまいりたいと考えております。

本日のテーマは、「京都の文化力を生かした教育」です。現在、改定を進めております新しい教育振興プランにおいても推進方策の６本の柱の一つに「文化と文化財」を新たに位置づけており、これまで以上に力を入れて取り組んでいきたいと考えております。西脇知事におかれては一層のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げて、私の挨拶とさせていただきます。

２．府教育委員会における取組状況報告

○「京都の文化力を生かした教育」について～説明

（橋本教育長）

３．意見交換

（西脇知事）

ご挨拶でも申し上げましたが、文化庁が京都に移転します。橋本教育長から説明がありました「京都の文化力を生かした教育」というのは、京都が持っている今の文化的な要素を教育に生かそうということです。京都の若者が積極的に文化の担い手になり、それが全国に波及できるような人材の育成、子どもたちが担っている伝統行事やお祭りなどの担い手不足の問題、地域のお祭り・催事が維持できなくなったという問題、文化財行政の観点などたくさん含んでいます。

そしてもう一つ。産業政策にも関わりますが、例えば、木津高校の生徒がプラスチックゴミを減らすアイデアを考えたものが、関西のビジネスコンペティションで金賞を獲りました。京都の場合、伝統産業、コンテンツ産業や食産業等の文化を基盤とした産業がかなり多くあるため、こうした観点からも文化と経済の融合の例も出ています。大学生の起業・

創業は当然のように行われていますが、高校生もそうしたビジネスへの参加もあります。
　橋本教育長の説明へのご意見でも結構です。また、文化庁が京都に来るということでさらにこんなことができるのではないか等、ジャンルを問いませんので順番にご意見をいただきますようよろしくお願いします。

（千委員）
　お茶に関して裏千家を代表するものではなく、個人的な意見となります。
　三密を避けるためずっと行事やお茶会がなくなり、神社やお寺の献茶式もほとんどが中止になり、あるところは10月になっても我々と神社やお寺の方だけで参列者なし、お茶会なしといったことになっています。稽古も家元では再開しましたが、例えば８畳の茶室に先生１人に生徒３人といったことをしております。これが来年どうなるか、残念ながら、いい見通しは考えられないと思うのです。ただ、いいなと思うのは、立ち止まって本来の姿に近くなっている感じはします。今はやたら何百人や何千人集めてとなっていますが、本来はこれくらいの人数だったのではないかと考えることについては、コロナもいい機会かなと個人的には思っています。
　来年、お家元がいろいろ想定され、お稽古なり学校などの茶道の授業などこれからの「茶道 ＷＩＴＨコロナ」を考えていかれると思います。

（西脇知事）
　確かに文化の要素が高いものは、映像よりも人と人との触れ合いが構成する要素があります。コロナのことを考えると見通しが立たないですが、必ず収束すると信じてご意見賜ればと思います。いつになるかは見通せませんが、いつかは収束すると思います。収束する前提でよろしくお願いいたします。

（藤本委員）
　府立高校の取組は素晴らしいと思うのですが、文化やその担い手を考えるときに長期的な視点に立ったビジョンと短期ビジョンの両方が必要だと思います。短期的なビジョンでいうと、府立高校生が文化活動に参加することや、文化の伝承者としてのプログラムを考えることはすごくいいと思いますが、その前提として「自分は京都が好き」「自分が京都のこういうことを学びたい」という主体的な動機がなかったら、「学校の授業だから」「成績に影響するから」やっているという非常に他力的で、自分のものにならないと思います。伝承者になって自分が伝える側になることはとてもいいと思いますが、中高生になったときに「僕は京都のこういう道に進みたい」「興味がある」という思いを持っていくには、乳幼児期が長期的にはとても責任があると感じています。たまたま嵐山で幼魚を放流しましたが、「地域で暮らしている川をきれいにしたい」「魚に元気になって欲しい」、乳幼児にこうした自然体験をうんと積むことはすぐに結果が出ることではないですが、ものすごく大

事なことだと思います。

昔から日本は自然への畏敬や四季があって折々の行事を大事にするということがありましたが、現代の家庭では、家族に四季折々、正しい伝統的な慣習をやっていたかというと、必ずしもそうは言い切れないと思います。それよりもバレンタインやクリスマス、ハロウィンで盛り上がるのです。盛り上がるのは悪くないのですが、幼児が興味を持つように、先生も何よりも家庭が価値をおいて、こういうのは素敵だな、どうしてなのだろうな、と思って生活を立てていくといったことを幼稚園や保育園が家庭や地域と一緒にやっていくことも改めて大事だと思っています。そのときに本物に出会わせてあげることは、とても大事だと思います。本物が持っている魅力や職人さんの技は年齢を問わず伝わると思うので、そういうものが身近に触れ合えて、小さい頃に刷り込まれていると、何かのスイッチが入るともう一回自分もやってみたいという追体験となり、原体験がもう一回やってみたいものになると思うので、地域の中のプロフェッショナルの方と交流していけるといいと思います。

例えばハロウィンは盛り上がりますが、誰かが主催しているわけでもなく、とりあえずあの衣装を着て街に繰り出すと良くも悪くも一体感が生まれるわけです。地域のお祭りは仕切っている人がいて、その人の言うことを聞かなければできない、外側から見ると日本のお祭りは気軽ではなくて面倒くさいと思うのですが、いやいや、だからこそ味わえるやりがいがあるのに、ということをもっと丁寧に家族が意識を持っていけばもっと変わっていくのではないかと思います。

（小畑委員）

文化がどうして大事か、その文化教育はなぜ大事かを考えると、二つあると思います。文化というのは国や地域のアイデンティティーそのものだから、しっかりと共有することが地域を強くするし、アイデンティティーなり文化を強く持つ、それに対して理解して自分自身でも強く持つ、自信を持つことが異文化に対する寛容さを生んでいく。自分に自信がなければ異文化に出会ったときに寛容にはなれません。異文化・外国の人との付き合いの中でも同じことが言えます。特に外国の人と付き合おうとすると、向こうの文化を知って、こっちの文化を紹介して文化についてお互いで理解をし出すと、単にビジネスで話をしていたときと次元の違う付き合いになるし、非常にビジネスにもよくなるし、お互いの理解が深まるということがあるので、そういう観点でそれぞれの地域の文化やアイデンティティーをしっかり教えていく、勉強していくことが非常に大事なことだと思います。

先ほどの教育長の話にありましたが、京都というとお茶とお花と陶芸は誰でも思います。京都市内の人はそうかもしれない。けれど南も北も広いから、北部の人にとっては自分の地域の文化、アイデンティティーとは違うかもしれない。京都だからお茶をやろうかお花、陶芸やろうかとなるのは少し残念で、地理的にセンターから離れた地域の人たち、生徒さんが自分のところの文化とは何かを掘り起こしていく、この中にも取組があったように読

みましたが、私の文化・地域の文化、祇園祭以外の自分の文化や体現した芸術・芸能は何か、それを掘り起こすようなフィールドワークを全ての学校で全ての生徒がやっていくことで、自分が見いだしたその地域の文化やアイデンティティーは忘れないと思うのです。そのことが自分自身の地域のアイデンティティーや文化に対する自信につながって、先ほど言った異文化に対する寛容さ、外国の人と付き合う時の自信・寛容さにつながってくる。そういう意味で文化の教育は大事だということが一つです。

もう一つは、先ほど知事もおっしゃいましたが、産業や地域の成長力の関係の話です。京都は、もともと都があって、そこに政治の中心があり、神社仏閣ができてそこから皇室文化が生まれ、皇室の文化が人を引き寄せて、集まった人が産業を興して、産業が生んだ富が文化に磨きをかけて、そうしたらまた人が集まって産業が生まれて、という文化と産業の円環の中で成長してきている感じがします。文化は高尚な、精神的なものだけでなく、産業や富とか「集人力」といった少し生臭いリアリティ、欲とからんだようなこととも関係があります。文化がないと富が生まれない、人が集まらないと考えれば、文化というのは生臭いリアリティがある、これ大事ですよね、そういう意味でしっかりした文化を磨きアピールすることがその地域の成長につながり、産業の活性化につながる、だから文化に対してはお金を掛けなければいけない。それは投資だと。あまりきれいな文化ばかりを教えるのでなく、そういう生臭い、現実的な文化の役割もしっかりと小さいときから教えて「だから文化にはお金をかけないといけない。文化が大事、我々も文化を身に付けていかないといけない」という二つの面があると思います。

京都の皇室の文化をなぜ日本中の人が知っているかというと、おそらく大昔からの交易なのです。それぞれの地域で採れる塩や魚を持ってきて、織物や工芸品で払ってきた。それが日本中に広がった。「京都ってこういうものを作っている街なんだ。行ってみよう、私の技を試してみようか、そうしたところには富があるから、事業家欲を実現しようか」といったことで人が集まってくる。そういうことが文化ってあるのです。そういうことを教えて、そういう文化に対する見方も、ある種、真実だと教えていくことも大事だと思います。

（安岡委員）

「京都の文化力を生かした教育」となると、いろんな相関図があって一つの命題では捉えきれない感じがします。「文化力」自体が衰退すればそれを育む教育ができません。府も創業 100 年以上の企業に老舗表彰をされていますが、老舗がコロナ禍の中で衰退して、廃業に追い込まれていますし、千委員が言われたように制約を受けた中での取り回しになっています。倒産が昨年よりも 24%増えています。倒産が増え、老舗がつぶれると、経済もそうですが、伝統や文化にも問題が波及します。そうしたところにも残していくためにはもっと力を入れていただきたいと思うところです。府立ならではの大きな指針の中で、先ほど教育長に説明いただきましたが、学校が独自に多くの取組をしているということは非

常に大事なことですが、生徒個々によって感じ方も違うでしょうし、入っていくことも個々によって選択肢がまちまちであることを考えると、仕掛けを作ってその網に引っかかるような形で文化教育、文化を考えていけばいいかなと思います。

例えば、定年後の再就職拠点「生涯現役クリエイティブセンター」があり、退職される方々が関心のある方がリカレント教育をして、取り組んでいかれています。先日見学に伺った本隆寺で修復がされていましたが、伝統の中で修復の形があるわけですが、現代ではＣＡＤ・ＣＡＭ（キャドカム）を使って設計図を書いて修復するというのであればＩＴの方々が就職して新たな第二の人生を全うするということがあります。学校教育の中でも教員の免許制度もありますが、その中でそうした方々を雇い入れて子どもの教育をしていけば文化もこれからいけるのではないか。京都は特に得意とする分野ですし、府を挙げて府の中での子どもに対する教育に力を入れていただきたいと思います。

（鈴鹿委員）

皆様のお話を伺っていて、文化がいろいろな面を持っていて多様なものだな、特に小畑委員の地元の泥臭い文化という話もあり、大切にしないといけないなと聞かせていただきました。千委員からあったように、コロナの中で文化を見直すきっかけになっていまして、私どもの業界でも、近年インバウンド向けのお土産が出ていましたが、そういうものはなくなっていますし、残っているのは地元で愛されてきた本物が多いのではないかと感じています。

海外の人にお話しして「本当にそうだね」と言っていただけるのですが、京都の文化力が高いと言われる大きな理由は、文化が博物館の中にあるのではなく生活の中に生きた文化の中にあるからこそ京都は文化力が高い、またそれが継続しているからこそだと思います。小さい頃から文化そのものが特別なものではなく日常の一部としてあるからこそだと思いますが、残念ながら核家族化も進んでいますし生活様式も変わって、そうした文化に接することがない方も増えていると思います。そこで教育面で何ができるかと考えると、生活の中で細々と生きる文化を体験してもらう、体験で終わるのでなく、可能であれば一歩進めてゴールを決めるのも一つではないかと思います。例えば、京都ではお店に行ってもお茶を習っているわけでなくてもお抹茶を点てて出されますし、華道をしているわけでもなくても自分でお花を生けられている。そうしたことを生活の中でする、当番を決めて季節の花を生けるでもいいですし、例えばお手前ができなくても１人でお茶を点てられる。お抹茶の粉をどう使えばいいかわからない子もいると聞きます。最低限使い方がわかる、もし可能なら、全ての府立高校の卒業生は卒業時点で、自分で着物の着付けができる、そうしたゴールがあるといいと思います。いざ着物を買おう、お茶を買おうというときに、使い方を知らなければ自分たちでそこに接しようとその後思うことはないと思うので、何か達成したというのがあったら経済面でも文化の担い手を育てていくことにつながるのではないかと思います。

一方、鑑賞するようなお能といったものは体験でいいと思うのですが、藤本委員も言われていたように本物を見ていると記憶に結構残っているもので、私が小学校の頃はお能の鑑賞会があり、未だにそのときのことを覚えています。また、そうした体験をして、将来「そういえば小学校のときに見たな」とつながればと思います。さらに、伝えるということがなければという話がありました。京都府の取組例でお互いの国の文化についての交流がありましたが、私自身も京都の文化をはっきり自覚したのは、留学をしたときにどういう風な生活をしているの、どんな文化があるのと聞かれ、言葉にして初めて認識することがありました。伝えることがなければ、なんとなくで終わっていくのです。オンライン交流はどんな文化であれ、地元のお祭りでも、自分たちの言葉にして話すことはすごく大事なことだと思います。

小さい頃に接しているのが大事というのは、私の体験だと、例えば、小学校でお抹茶に接していない子はグリーンティの甘い抹茶に慣れています。しかし、１歳頃から娘に抹茶をあげていたら、ごくごくと１杯分は飲み干すほど大好きなのです。自分でも抹茶は苦いと言われると思ってあげたので意外だったのですが、そういうものかなと思い実感しています。ＮＨＫの子ども向けの歌舞伎を見ていると、楽しいのか見得を切るところで見よう見まねで真似ています。ベースがなくても１歳の子でもこうして関心を持つなら、そういうことを続けていけばみんな当たり前に普通になっていくのではないかなと思います。そうしたことが府内の小学校でできればと思います。

（橋本教育長）

小畑委員がおっしゃったように、地域の文化はアイデンティティーそのものだと思います。それと同時に知事からありましたように、祭りの担い手がいなくなって大変だ、継続できないということがあります。私としては小学校の授業の中でも地域の歴史・文化を題材とした課題解決型の学習をする、単に知るだけではなく、主体的に学んで深めることは非常に大事であると思います。今、小学５年生で郷土学習をしており、それを発展させさまざまな文化・文化財、地元が抱えている課題をしっかりと学ばせて、最終的には地域社会との絆を大切にしていき、つながれるような人材育成になるのかなと思いますのでそうしたことをやりたいです。

鈴鹿委員から鑑賞の話がありましたが、本物に小さいうちから触れることが非常に大事だと思います。それこそ文化庁が来ますので、こういう事業は文化スポーツ部でやっておられますが、文化庁の支援のもとにやっていますので、質と量の充実を図っていただきたいと思います。あわせて京都のように南北に長い地域ですと、近くに観に行きやすい環境があるところとそうでないところがありますが、あらゆる地域の条件面で差が出ないような事業のあり方も大事かなと思います。こうしたところで文化庁に期待をしたいと思っています。

（西脇知事）

私にとって今聞いた話は全て非常に参考になる話が多かったです。

小畑委員が言われたように自分たちの歴史や文化を学ばないと異文化へも寛容になれないということでしたが、これは国際人として最低条件と言われ、日本以外の諸外国では当たり前となっています。日本は外国のことを学ぼうとするわけですが、海外で聞かれるのは日本のことばかりなのです。いま教育長からありましたように、教育委員会の資料で事例は多い一方、どれくらい普及しているか資料がないのですが、この間、「行き活きトーク」で洛西高校に行って、６人の生徒たちと話をし、そのときに地域の近所のことを学んでいると聞きました。しかし、まだ２年目と言われました。始まっているだけいいのかもしれませんが、やはり地域のことを学ぶことは大切ではないかと思います。

藤本委員は小さなときからとおっしゃいましたが、いつからでも遅くはないと思うので、自分たちの地域の歴史を学ぶことはいいことと思います。また、千委員からありましたコロナ後の話は、コロナで学んだことは、コロナが明けたらきちんと人と人を向き合うことを大事にしたいと改めて認識しており、京都が持っている本物の強みは観光面でも必ず生きてくると思っています。老舗企業の話もありましたが、今までも応仁の乱も明治維新も第二次世界大戦も生き抜いてきたわけです。コロナもいずれ乗り切るつもりで本物を見つけていくことが非常に重要だと思いました。鈴鹿委員からゴールの話がありました。１歳のお子さんに抹茶を飲ませているチャレンジングさに敬意を表したいと思います。

続いて、文化庁が移転することは一つのターゲットイヤーでもあるので今までやろうとしていたけれどもできなかったこととか、いろんなコラボレーションも声を掛けやすいという条件もあります。学校教育においてこんな取組があればいいのではないか、アイデアベースでいいので、具体的な提案があれば、ぜひ聞かせていただきたいと思います。

（小畑委員）

自分の文化が何かというフィールドワークで掘り起こしをすると、わからなかったことが見つかるかもしれない。ＩＣＴを使ってコンテンツにする、例えば、私も伊根町に行ったときに小学生や中学生が観光ガイドをしていました。自分たちでコンテンツを作ってやっているわけですが、その中にフィールドワークをして発見した文化なり芸能なりを織り込みながらコンテンツを作って観光ガイドに使う、あるいはインターネットで配信して他地区にアピールしていく取組です。自分の言葉にしないとなかなか身に付かないというのはその通りで、自分の言葉にして発信していく、いろんな人に説明する、そうすると自分の身に付いていき、地域の財産にもなる。文化とＩＣＴと融合した教育ができ、一石二鳥、三鳥の教育の在り方が出てくるのではないかと思います。

もう一つが、文化庁が移転するので、文化を核にして産業を興し、成長してきた文化と産業の円環の中の京都らしい成長モデルを教育の中にも取り入れ、日本全体に広げていくことをやっていくと、文化が一つの力になっていくのではないかという感じがしています。

（安岡委員）
　もちろん文化庁がなぜ京都に来たかということを考え、五感を使った教育ができればいいと思っています。伝統文化が相乗効果を生んで、一つの意識改革、京都府民、市民含めて育てていかなければならないと思っています。長い年月を掛けて培ったものを生かして、醸成しながら次世代に伝えていくことが必要だと思います。

（鈴鹿委員）
　コロナ禍でＩＣＴを使ってとなると、特に生徒さんにこれを見なさいとか、授業の代わりの宿題ですというと見たがらないと思うので、単に発信するだけでなく、交流する仕掛けができたら面白いなと思います。地元を歩いて地元を知るいい機会ですので、「地元の周りにある神社は何だろう」から話を深めてもいいですし、京都で史跡もいろんなところがあるので「これは何かな」から話を広げるのもいいと思います。
　後は普段の生活で、こうしているよ、ということを交流できる場は一番皆が興味を持つことになるのかと思います。交流するというクローズドの場を文化庁から発信してもらう、それで興味のある人はどんどん調べられるようなコンテンツがあればいいなと思います。

（藤本委員）
　文化を使いながら教育を目指すというのは他の都道府県、東京にはとてもできない、文化庁がこっちに来るというのはタイムリーな話だと思います。さまざまな可能性があると思います。
　母国語を日本語以外に持っている幼児が幼稚園にいます。市内には多いです。日本語をしゃべれない子と日本人の子がどうやって交流するのかと思うでしょう、ところが小さい年齢ほど何も介さずに意思疎通していくのです。言語を持たない、ノンバーバル（非言語）の段階だからこそいろいろ交流できるのです。しかし、先生と保護者は交流できないのです。そんな風に価値観ができあがる前に、本当にわかるのかなと思われるかもしれませんが、子どもは本物を見抜く力があります。現に、幼稚園では毎日陶芸家の卵みたいに砂遊びをするわけです。そのままどんどんやれば陶芸家になるし、今、編み物が流行っていますが西陣の道もいける。木工遊びもやっていけば宮大工になるかもしれない。「賢い手とよくよくする頭」と言っていますが、賢い手を持った子どもがいっぱい居ます。幼稚園は生活なのですね。生活を主体にしている場面では下地になる経験をしていますが、いいか悪いかは別にして小学校に入ると教科を教える、学ぶ、正しい知識を正確に覚えていくことにガラッと変わってしまう。この辺の変わりようを京都は独自のものを取り入れていく、例えば先ほど鈴鹿委員がおっしゃった基準「ここまでできたらこんな風になるよ」という目標があってもいいかもしれません。そうした工夫を抜本的に入れていかないと、今のまま中高生になるとたまにやる、学校の授業であるからやらざるを得ない、聞かざるをえな

いみたいなことでは根付いていかない。根本的な、根深いところからしっかり取り組んでいく必要がある。それは文化庁が来られるタイミングでなんとか前に進めるべきではないかなと思います。

（千委員）

お話を聞いていて、一つ確かなのは小さいときに体験することはとても大事で、例えば幼稚園の頃にお茶の体験をして苦くてまずかったなというのでもいいのです。つまんなくて寝ていたというのもよくて、「それ何？」というのが一番恐ろしいことだと思います。だから、小さい頃に体験をすることは必要です。

私はいつも「ＩＴや英語力ではなくて、日本語」とことあるごとに言っているのですが、日本語と日本史、それがだんだんＩＴや英語に押しのけられていく。そうすると結局、自分で自分の国の歴史もわからないままになっていく。何年かごとに、この間はＩＴを推進して、次の何年は日本語、日本のことを学びましょうということができるといいです。一度には無理ですが、そういうことができるような各府県の教育委員会であればと思います。遠くをみてどこまでに全てのことを達成できればいいことにしないと、あまりに毎年盛りだくさんすぎて、あれもやりたいこれもやりたい、生徒はアップアップしてしまって、上っ面だけで卒業してしまう気がします。

それと基本は畳だと思います。家に畳の部屋がないという方が増えています。お茶も畳の生活をしていれば普通のことなのです。だけど、今、畳の部屋もないから変に難しい作法だと若い方が思うけれども、ふすまと畳があれば普通のことだと思います。お花でもそうだと思います。床の間に生けていたわけですから。問題は畳だと思います。

（橋本教育長）

海外では美術館や博物館を活用した授業がさかんに行われています。もちろん、タダで入れるからだと思います。本物や価値あるものに小さいうちから実際に触れて学習している意義は大きいと思います。京都は博物館がありますが、立派な文化財がたくさんありますので、所有者にもご協力をいただきながら、学習目的であれば無料でフィールドワークができる環境を整えていただく。それで歴史・文化を深める。将来を考えると文化財保護意識を高めておかないと、ということもあります。そういう取組ができたらと思います。モデル的にやって、文化庁でそれを見て、幅広く普及していただく。そういう仕組みを作れたらと思います。

（西脇知事）

昨年、ＩＣＯＭ（国際博物館会議）がありました。そこで私は、京都は街全体が博物館だというあいさつをし、ほとんどの国の方が共感していただきました。それは生活の中に文化が根付いているということで、つまり文化を学ぶには身の回りのことや地域の歴史、

ひいては我が国の歴史を学ぶことになるのです。それは一つ重要かと思います。

藤本委員の話にもありましたが、小さいときの体験は重要だと思います。例えば、いろんなブースがあったときに、小学生はものを作るブースに殺到するのですが、中高生になるとものを作る、編み物でも陶芸でもいいのですが、そこから急に離れていくような気がしてしまいます。なるべく遅くない時期にでも体験できることが必要だと思います。

今日聞かせていただいたことは実施したいことばかりでした。なぜこういうことを申し上げるかと言いますと、文化庁が来ますが、もともと文部科学省の中にあった組織なので、教育行政と密接な関連があるはずだと思っています。これを機会にもちろん教育委員会、文化スポーツ部だけでなく、全ての部局にも関係しているところなので、改めてその意味を考え、いろんな施策を打ち出したいと思っています。本日は入り口ということで皆さんから貴重なご意見を賜りました。引き続きこのテーマについてご意見を賜りたいと思います。本日はありがとうございました。